

〈論 文〉

歴史的現在における 『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山 20 年展』

——モノ、表象、展示、マイノリティの観点から——

青 木 恵 理 子

要旨：福岡県大牟田市と熊本県荒尾市に広がっていた三池炭鉱は、1960 年頃には政治的・社会運動の中心であったが、1997 年に閉山した。現在は、世界遺産「明治日本の近代化遺産」（2015 年登録）の表象が、1960 年頃とは全く異なる相貌を三池炭鉱に与えている。閉山 20 年目の 2017 年に、『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山 20 年展』が、大阪府立労働センターにおいて開催された。私は 2013 年から 2017 年までその実行委員会「関西・炭鉱と記憶の会」のメンバーとして活動した。本稿は、歴史的現在のなかに『三池炭鉱閉山 20 年展』はどのように位置づけられるのかを、モノ、表象、展示、マイノリティという観点を視座にとらえて、私自身の経験を踏まえて明らかにしていく。

はじめに

福岡県大牟田市と熊本県荒尾市に広がっていた三池炭鉱は 1997 年に閉山した。1960 年頃には、「総資本対総労働」や「三池なくして安保なし」などと語られ、全国的な関心を集め、未来を賭けた政治的・社会運動の中心であった。現在は、巨大な三池炭鉱遺構をその一部とする世界遺産「明治日本の近代化遺産」（2015 年登録）の表象が、1960 年頃とは全く異なる相貌を三池炭鉱に与えている。閉山 20 年の節目に、『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山 20 年展』が、エル・おおさか（大阪府立労働センター）において、2017 年 5 月 5 日から 9 日まで開催された¹⁾。私は 2013 年 11 月から 2017 年 6 月までその実行委員会「関西・炭鉱と記憶の会」のメンバーとして活動した。本稿は、歴史的現在のなかに「三池炭鉱閉山 20 年展」はどのように位置づけられるのかを、モノ、表象、展示、マイノリティという観点を視座にとらえて、明らかにしていく。

1. 展覧会の原理と歴史的現在

本章では、モノが表象として立ち現れる一つの

契機であり、展覧会の原型でもある、「人がモノを集めて展示する営み」に光をあて、展覧会という営みを、原理的に理解し、歴史的現在のなかに位置付ける。

モノを集めて展示する営みは、長い歴史を持つ。多くの研究が、このような営みの典型としてミュージアムを、その前身として中世の王室の宝蔵室や後期ルネッサンス期の「驚異の陳列室」を、位置づける。ミュージアムは、西洋における近代を標すものとして始まった。ミュージアム制度の内側から見れば、非合理的で非科学的な権力と知に裏打ちされ、混沌とした宝蔵室や「驚異の陳列室」とは異なり、ミュージアムは合理的な世界認識と科学によって秩序づけられたものである（クレイン 2009 [2000]: 11; 松宮 2003; 村田 2014; ポミアン 1992; 吉田 1999 ほか）。歴史的にミュージアムの成立を明確に標したといえる、大英博物館（1753 年開設）とルーブル（1793 年開設）は、議会制民主主義の成立および市民政府を旧勢力から守るための国民意識の高揚と深く結び付いた、政治的な文化施設であった（ポミアン 1992; フェーア 2009: 185-186; パレ&プーロ 2007: 14-16; 竹沢 2015: 12-16; 村田 2014: 73-

81)。

ミュージアムは、博物館や美術館だけでなく、植物園、動物園、水族館、図書館、史跡、自然保護区、世界遺産等をも包括する、一群の近代的文化装置の中心に位置していると同時に、それらの意味と価値を支えるマスター装置ともいえる（松宮 2003: 11 参照）。これらの文化装置は、国家や西洋を中心とした文化ヘゲモニーを後ろ盾とした一定の世界認識と同時に、その世界認識を表出させるモノの分類や配置についての限定された知のシステムを規定していくという点においても、政治的である。その政治性は、通常ならば一望できない、遠隔のモノや秘匿されたモノを一望できる近代特有の「パノラマ的視覚」の快楽を求める来場者によって、積極的に、無意識のうちに支えられてきた（村田 2014: 81）。

モノを集めて展示する営みは、ミュージアムがその布置構造（constellation）の中心に位置し、その起源を「驚異の部屋」に遡ることのできる近代文化装置群よりも、ずっと広大な領域に広がっている。カトリック寺院には、多くの聖像、壁画、ステンドグラス、床の装飾、奉納蠟燭の並ぶ燭台、聖福者の墓など様々なものが集められ並べられている。プロテスタント諸国においては、カトリック教会（建造物）の多くはプロテスタントにより接収された。内部の設えの簡素化がなされたが、基本的にはそのまま引き継ぐことになった。神の作りたもうた世界を寿ぐことも目的としていた「驚異の陳列室」から、脱聖化することによって誕生したミュージアムは、聖なる双生児を持ち続けてきたのである（竹沢 2015: 11-12 参照）。ミュージアムは、脱聖化した帝国或いは国家を代理し（represent）、それらを表象し（represent）寿ぐ文化的政治装置として生み出された。ミュージアムはその語を、文芸・音楽・学問をつかさどるギリシャ神話の女神たちムーサイ（ミューズ）からとり、特に初期のミュージアム建築の多くがギリシャのパルテノンを模している（田中 2014: 405 参照）。脱聖化を自任しているミュージアムは、聖なる威力を呼び寄せ、聖なる双生児と共存しているため、その（星座的）布置構造 constellation は聖なる力の瞬きのなかで常に揺

らいできたのである⁽²⁾。

モノを集めて展示する営みは、商品化の領域にも広がっている。歴史的にかなり遡ったとしても、或いは、隔絶された地域に分け入ったとしても、市場があり、売り手はモノを集め見せている。ミュージアムの成立期にはすでに、産業革命を経て新興ブルジョワジーの隆盛があり、商品消費の領域は拡大していた。革命祭典の興奮を引き継いで、1798 年にパリで最初の産業博覧会が開かれ、やがてそれがヨーロッパの諸都市に波及していった（吉見 1992: 18）。ヴァルター・ベンヤミンが「商品という物神の殿堂」と名付けた、買い物のための小径－パッサージュ－も、産業博覧会同様、フランス革命を引き金として誕生した（ベンヤミン 2003）。産業博覧会は帝国主義と結びついて、1851 年に史上初の万国博覧会、ロンドン万博の開催にいたった。その後、万国博覧会は、欧米諸国さらにはそれ以外の大都市で繰り返し開催されてきた。吉見は、初期の万国博覧会の特徴として、次の三つの点をあげている。第一に、産業の展示を通じた「帝国」の提示。第二に、商品世界の展示。特に、1930 年代以降は、大企業の広告展示の側面が、帝国主義の側面を凌駕していった。最後に、万国博が、中世以来の都市の見世物を飼いならして取り込み、近代的な大衆の娯楽提供の機会として発展していった（吉見 1992: 22-25）。万国博覧会は、国家と帝国の代理／代表 represent として、その威光を表象 represent する政治的文化装置として、明らかにミュージアムの布置構造に位置付けられる。同時に、ミュージアムが、国家や帝国の権力からは独立した原理で作動しうる、モノと非モノの消費からなる大衆の消費文化の影響を受けることを示している。モノを集めて展示する営みという点において、また、受容者（買手や来場者）の消費の楽しみを生成するという点において、ミュージアム／展覧会と市場、両方の場におけるモノと人との関係は相同性をもつ。

日本では、19 世紀半ば、幕末から明治初期にかけて、政府の若い要人たち（使節団）が、欧米世界に赴き、近代国家と帝国の政治的文化装置、ミュージアムと博覧会を学んだ。そして、1882

年（明治 15 年）には、日本初の本格的な常設の博物館（現在の東京国立博物館）が開設された。設計をイギリス人に委託したその建物は、同時代の英米圏のミュージアム建築の様式を踏襲していた。また、近代国家の支持者としての「市民」が誕生していなかった当時の日本において博覧会や博物館が多くの人々を集めることが出来たのは、江戸時代から「物産会」と寺社の御開帳という、モノを集め分類して見せるという伝統が根付いていたことによる（吉見 1992）。一方、近代国家の装置として博物館を導入しようとした日本政府は、博物館や博覧会を、物産会や「御開帳」とは一線を画したものにしようとしたという（村田 2014: 89-129）。明治初期における欧米発のミュージアム受容のプロセスは、政府主導で導入された政治的文化装置（権力者による「戦略」）に対し、多くの庶民たちは独自のやり方で楽しむという戦術で対応したことを示唆しているといえるだろう。来場者が結果的に主催者の意図を組み替えてゆく、このような実践は、現代のミュージアム経験のなかでも可能であり、それがミュージアムだけでなく様々な局面での新しい可能性を開いてゆくことになるのではないかと、村田は指摘する（セルトー 1987 [1980]；村田 2014: 21）。

ミュージアムという政治的文化装置は、非西洋の国家に移植されることによって変容しただけでなく、歴史のなかで大きく変容した。第二次世界大戦以前においては、帝国主義的／植民地主義的發展は、列強諸国の責務であると列強諸国によって位置付けられ、国際的ヘゲモニーのなかでは自明視され問われることはなかった。そのような時代においてミュージアムは帝国や列強国を代理 represent するものであり、一方的な表象 represent の対象となった人々の声が反映されることは、構造上不可能であった。第二次世界大戦後、相次いで旧植民地が独立し、帝国主義と植民地主義は倫理的地位を失った。新興独立国の人々は、宗主国がそこに築いたミュージアムその他の施設を引き継ぎ、自らの声を反映させるようになった。1960 年代には、アメリカの公民権運動や、既存の政治的権力を疑問に付す先進諸国における学生たちや若者たちの活動が、国家内外において周辺化され

た人々の権利を訴えていった。その流れは、1980 年代には、人権とポリティカル・コレクティブネス（以下 PC）という思想に基づいた世論形成へとつながり、ミュージアムにおいて一方的な表象の対象となってきた先住民をはじめとするマイノリティの人々が、ミュージアムに対して異議申し立てや、展示物の返還要求をするようになってきた。国連では、1982 年の「先住民族の権利に関する宣言」の草案作成を皮切りに、先住民族の人権擁護の計画が実施され、2007 年に同宣言が採択された。このような国内外の動きの中で、それまで表象の一方的な対象であったマイノリティの人々が学芸員などとしてミュージアムの設立や展示作成に参加するようになった（田川 2014；窪田 2014）。

このような歴史的流れの中で、ダンカン は 1971 年に、ミュージアム研究雑誌 *Curator: The Museum Journal* において、ミュージアムは、政治性を不可視化し、物事に対する唯一の規準を託宣のごとく上から発する神殿ではなく、討議や批判が闘わされるフォーラムであるべきであり、そうすることによって、革新が可能になると主張した（Duncan 1971）。ミュージアムという場の政治性を明らかにし、モノについての多様な解釈や声がせめぎあう場所とすべきという見解は、その後のミュージアム研究にも引き継がれている（Marstine 2006；フエア 2009）。ミュージアムの内外からその政治性が積極的に把握され、マイノリティを含む多様なエイジェンシーの関与が支持され、ミュージアムや展覧会のありかたが世界的に変化してきている。日本においても、同様の変化が見いだされる（竹沢編 2015；ヘンリ 2007）。そのような変化は、市井の人々によるミュージアムや展覧会という形でも実現されている⁽³⁾。

ディシプリンの成立や展開が帝国主義・植民地主義と親和性が高かったという反省が広く行き渡っている文化人類学では、1980 年代以降盛んになった権力批判やポスト・コロニアリズム批判の視点からミュージアムや展示について議論することが盛んである。これらの議論では、「フォーラム（討議の場）」化の議論同様、言説（言語表現）化が前提となっている。

しかしながら、現代におけるミュージアムの変化と隆盛をけん引しているのは、娯楽的消費と親和性の高いアート化であると村田は指摘する。例えば、帝国主義・植民地主義によってミュージアムに蓄積された負の遺産についていえば、言説による論争ではなく、アートによる和解が推し進められている（村田 2014: 195-207）。村田はその具体的な実践例として、パリの人類学博物館のコレクションを引き継いで 2006 年に開館したケ・ブランリ美術館をあげている。そこではかつて民族誌資料として展示されていたモノが、民族学的秩序ではなく、形状など視覚的秩序に従って、ショーウィンドーに飾られた高級モード服のようにならべて展示され、資料の説明などを含め言説は周辺化されている。このような展示のしかたに対し、多くの人類学者が、非西洋の文化を近代芸術という西洋の文化の文脈で切り取ったものであるとして、批判を展開した（村田 2014: 201-202；川田 2007；クリフォード 2002 [1997]：286 参照）。人類学者たちの批判をよそに、ケ・ブランリ美術館は、パリ市民と観光客両方から圧倒的人気を集めている。主催者にとっても来場者にとってもポストコロニアル批判やマイノリティの問題を必ずしも突き付けられなくてすむアートという方法は、ポピュリズムと娯楽的消費を無視できない現代という時代に適合的であると、村田は指摘する（村田 2014: 203-204）。

人類学的な資料の展示に限らず、来場者が市民から消費者の傾向を強めている時代的潮流の中で、ミュージアムや展示の運営は、行政的なものから消費社会的なものに変容せざるをえない状況になっている。昨今のミュージアムショップやカフェなどの娯楽的消費施設の拡大は、それを如実に示している。このような変容は、時代の流れ故にしかたのないという側面だけではなく、ミュージアムが娯楽的消費のもとばらばらになっている諸個人を集わせる新たな空間になる可能性を孕んでいると、テート・モダン館長の以下のようなヴィジョンを引用しながら、村田は指摘する。

ミュージアムという場が、もはやコレクションをみるためだけに訪れる場所ではなくな

り、さまざまなイベントやワークショップが沢山開かれる中で、人々が思い思いに集い、出会い、語り、時間を過ごす「ミーティング・プレイス (meeting place)」になり、また「個人個人が自分のミュージアムをプログラミングする」ようになる・・・(デルコン 2014；村田 2014: 247)。

上述のようなプログラミングは、ファンやマニアによる「文化」消費のモデルそのものである。言い換えれば、個々人がお互いの領域を趣味の領域とみなして侵犯を避け、思い思いに過ごしたい多くの人が集うことのできる場となるというのが、現在切り開かれつつあるミュージアムの在り方である。正当性、正統性、真正性などが問題にされない共在の場であるということになる。村田によれば、これは、京都のマンガミュージアムやロンドンのテート・モダンではすでに現実化しているという（村田 2014: 247-250）。

以上のように、社会の変容に連動して、マイノリティの声を響かせるというポストコロニアル批判に代表される方向と商品消費をふくむ娯楽的消費とアート化という方向、さらに集いの場 *meeting place* へとミュージアムが向いつつある歴史的現在において「三池炭鉱閉山 20 年展」が開催された。

2. 三池炭鉱とマイノリティ

2.1. 日本の石炭産業と炭鉱社会

産業化のはじまりにより、石炭は、殖産興業と富国強兵の日本国家の指針とともに、それらに不可欠なものと位置づけられた。石炭産業は終始一貫、国家政策が深く関与する産業であった。炭鉱からの膨大な収益は、三井、三菱、住友などの財閥系企業の礎を築いた。しかし同時に、石炭産業の発展は、労働者たちに過酷な労働と多くの犠牲を強いた。

囚人、与論島出身者、女性、朝鮮人、中国人、戦争俘虜などのマイノリティの労働力使用や、生活全体が最低の状態で管理された飯場に居住し低賃金で長時間働くことを強いられた「タコ」と呼ばれる浮遊する最下層男性たちの使用は、極めて

過酷であった。また、一般の坑内労働者に関しても、落盤、出水、ガス突出、炭塵爆発など多くの犠牲者を出す事故だけではなく、坑内機械による事故、珪肺、塵肺、振動病など労働災害率は一貫して極めて高かった。

第二次世界大戦後は、石炭産業は経済復興のための重要産業と位置づけられた。多数の労働者をあつめるために、会社が住居を用意し、光熱費と水道代も負担したため、戦災被害者、引揚げ者、復員者など生活困窮者たちが、生活の可能性を求めて炭鉱に集まった。1950年代の中東での石油発見を契機として、国際的政治関係の中で日本も、石炭から石油へのエネルギー転換の方針をとった。その結果、1960年代から炭鉱の閉山が全国で次々に起こり、大量の炭鉱離職者が生じた。エネルギー転換と時期を同じくして、1957年には原子力発電開発が国策で開始されたが、少なからぬ炭鉱離職者が、職を求めて原発を渡り歩く原発ジプシーとなったといわれている。炭鉱離職者の一部は、ブラジルに移民し、新たな困難を生き抜くことを余儀なくされた。また、生活保護に頼らざるを得なくなった人々も多く、生活保護の世代連鎖が生じている旧産炭地もある。偶然性を孕みながらも、少なからぬ炭鉱坑内労働経験者とその家族は、時代の流れのなかで一貫して周辺化されてきたのである。

以上のような歴史的社会的状況、相次ぐ大規模事故の報道、地下労働に対する蔑視などに起因して、炭鉱社会外の眼差しが差別的であることは珍しくなかった。筑豊では、炭鉱で働く人たちは「下罪人」と言われた。筑豊だけでなく九州の炭鉱で働く人たちとその家族は「たんこもん」「たんこたれ」「炭鉱太郎」と蔑称された。北海道では、このような蔑称はなかったようだが、炭鉱社会以外の人たちからの蔑視はみられた。北海道の漁師町で生まれ育った女性が、家族の経済的困窮を見かねて一人でも口減らしができればと炭鉱労働者と結婚をきめた。彼女が父親に報告すると、彼は「炭鉱か」と寂しそうに言ったそうだ。貧富の尺度とは別の差別の尺度がそこには働いていたようだ⁽⁴⁾。

また、炭鉱を見たこともない大都会の人々の間

でも、炭鉱社会の人たちへの蔑視が見られたようだ。1958年生まれのヤリタミサコ氏と、本展「三池炭鉱閉山 20 年展」実行委員会のメンバーのひとりである1947年生まれの東川絹子氏は、炭鉱出身であることにより侮蔑的言葉を投げかけられたことを記憶している。北海道岩見沢市の朝日炭鉱社宅で生まれ育ったヤリタ氏は大学進学のために東京で、福岡県大牟田市の三池炭鉱社宅で生まれ育った東川氏は高校卒業と同時に就職のために京都市で、暮らすようになった。ともに18歳だった。ヤリタ氏も東川氏も、移住して間もなく、「なんだ、炭鉱の娘か」という侮蔑的な言葉を炭鉱のことを何も知らない知人からなげつけられて、驚き憤慨した経験を、全く別々の機会に、問わず語りで話してくれた。時代も11年の開きがあり、出身地も移住先の場所も異なっている。朝日炭鉱は北海道の小さな炭鉱、三池炭鉱は九州にある日本最大の炭鉱だったが、知人たちにとっては、個々の炭鉱の細かな違いを捨象した「炭鉱」というラベルが、漠とした侮蔑を引き起こすものであったようだ。彼女たちには全く予期せぬ出来事であった。炭鉱社会での生活と都会の人々の生活を比較しても、この侮蔑の根拠が全く見いだせなかったと語る。彼女たちは二人とも詩人であるが、全国的に文化活動の盛んであった炭鉱社会に生まれ育つことによって、詩人としての素養が育まれたと言えるかもしれない。

また、18歳から定年の55歳まで鉱員として北海道の住友赤平炭鉱で働いた、84歳（2014年当時）の男性は、次のように語った⁽⁵⁾。

子供の時は釜石で暮らしていたけど、戦災にあって住むところもなくなったの。父親は音楽家だったけど、戦争直後に音楽の仕事なんかなかったの。だから、北海道の炭鉱で働くことにして、家族で引っ越してきた。来る前に、親戚にそのことを話すと、「炭鉱に行くなら縁を切る」とまで言われた。来るまでは、刑務所みたいところだと思っていたけど、来てみたら居心地がいいの。

周囲からの偏見や差別とは対照的に、炭鉱社会

にくらした多くの人たちは、その暮らしに誇りと愛着を持っている。就職、進学、その他の理由で炭鉱社会を離れた人々は、限らない望郷の念を抱いている場合が多い。私自身、北海道夕張市、岩見沢市朝日町、赤平市、福岡県大牟田市や荒尾市などの炭鉱社会に暮らした人々と話すなかで、彼らの熱い思いに強く印象づけられた⁽⁶⁾。またインタビュー集、調査報告書、上野英信や森崎和江の聞き書き集、ドキュメンタリー映像のなかにも、語り手自らが帰属した炭鉱社会への誇り、愛着、望郷の思いが確実に感じ取れる⁽⁷⁾。

戦後日本の炭鉱社宅⁽⁸⁾のつくりは、社員、職員、鉱員用によって異なっていた。社員は会社の統括に携わり、職員は坑内や鉱員の管理に携わり、鉱員は坑内で採炭に携わる。三者の社宅は、広さや間取りの相違、トイレ、水道、風呂が共同であるか否かの相違があった。社宅のある地区も社員、職員、鉱員により異なっていた。炭鉱社会として言及されるのは一般に、炭鉱会社の従業員のうち圧倒的多数を占めていた鉱員とその家族が軒を並べて暮らしていた社宅群に展開されていたものである。

炭鉱社会では、出身、出自、経歴、学歴、などが問われることはなかったと言われる。鉱員とその家族は、高度成長期以前は、ベニア板で仕切られた長屋形式の炭鉱住宅に暮らしていた。トイレと水道は共同であった。労働を終えた鉱員たちは、坑外にでると鉱員用共同風呂とともに石炭粉と汗を流した。住宅近くには鉱員とその家族が入る共同浴場があった。鉱員たちは基本的に平等であり、労働組合員として連帯し、坑内労働は危険であるため、危険を避けるために必然的に協力関係が生まれていた。鉱員の妻たちは主婦会を形成した。女性たちは主婦会メンバーとして連帯するだけでなく、坑内労働の危険への気遣いを共有し、ひとたび事故が起こった場合には強い共感が引き起こされた。味噌醤油、おかずやご飯のやり取りを日常的に行い、家と家の間を自由に行き来し、隣家や地域住民との距離は空間的にも社会的にも近く、とても暮らしやすかったと、炭鉱住宅に暮らしていた多くの人々が異口同音に答える。労働組合や主婦会活動に連動して、「歌声」と呼

ばれるコーラス、文芸、絵画などのサークル活動や、家庭内での民主主義の実践なども、1950年代1960年代の炭鉱社会では珍しくなかった。

2.2. 三池炭鉱

三池炭鉱は以上のような特色を他の炭鉱と共有しながら、他とは区別される特徴を有していた。

第一に、自然条件に基づく生産性の高さである。三池炭田は、極めて良質の石炭を擁し、福岡県南部から熊本県北部、さらに海底へと広がっている。日本の炭鉱としては際立って層が厚く、傾斜や褶曲も少なく、日本の炭鉱のなかで、最大の出炭量を記録し、最先端の機械も導入可能であった。

第二に、国策に最も近いことによる、会社の権力性である。1873年に官営化された三池炭鉱は、1889年に三井組が落札し、以後三井三池炭鉱となる。石炭産業は国策とともにあったが、三井炭山は最も政府に近い会社であった。第二次世界大戦中の朝鮮人、中国人、戦争俘虜に加え、三井三池炭鉱は特権的に、創立当時から1930年まで、囚人を使役した。また、与論島からの移住者を劣悪な労働条件で港湾労働者として使うなど、強権的経営を行った。

第三に、日本最強の労働組合の成立と三池闘争、その終結を起点とする、労働者による労働者主導の労働体制の劇的な崩壊という特徴である。この一連の歴史的過程には、炭鉱コミュニティの成立、全国労働者の連帯、およびそれらの棄損が連動していた。1946年に形成された三池労働組合（三池労組）は、当初会社に協調的であったが、やがて、労働者の命とくらしを守るために連帯を深め会社に対抗した。1953年には合理化のために会社が出した大量解雇処分を、職員組合との共闘をもって、撤回させた。その後三池労組は、労働者が労働体制を決めてゆく実力を発揮するようになった。鉱員が相互に競争的敵対的になり自らを働きすぎに追いやることのないよう、種々の採炭現場を均等に担当できるよう、三池労組は「輪番制」を実施した。この体制は、労働者が自らの労働を管理するという、労働についての鉱員の自治であり、会社の統制のもとで鉱員を管

理する任にあった職員のあり方と対立するものであった。このような対立以降、三池職員組合は三池労組と共闘することはなかった。生産性を第一とする会社は、合理化推進と同時に労組のこの体制を阻止すべく、1959年12月、1200人余の鉱員に指名解雇を通達する。それに対し労働組合は全面ストライキをもって応じ、三池炭鉱の操業が全面ストップした。この歴史的事態は、三池闘争あるいは三池争議と呼ばれる。三池闘争は、全国の労働者と資本家を揺り動かし、総資本対総労働の闘いと呼ばれた。全国の労働者や学生が三池労組の支援に駆けつけ共闘し、それに対し、自由主義的経済を必須とする財界は三井会社への助力を行い、警察と暴力団が会社に連動した。

ストライキにより収入を断った三池労組員たちは全国からのカンパによって生活した。それは、1万円生活と呼ばれ、当時にしてもとても苦しいものであった。経済的窮状と会社による働きかけ、組合の方針をめぐる内部対立により、三池労組内部批判勢力指導のもと、1960年3月17日に、ストをしないことを会社と約した、労使協調路線の三池炭鉱新労働組合（新労）が分離成立した。新労員の妻たちは、主婦会から脱退し、新労の主婦会は形成されなかった。分裂前に約1万人いた三池労組員であったが、その3分の1が新労に移動した。これにより、それまで連帯していた人々の間に楔が打たれた。労組メンバーが新労メンバーに激しい敵意を向け、暴力的にふるまうこともあった。労働組合の分裂は三池労組の弱体化をもたらしただけではなく、炭鉱社宅におけるコミュニティを崩壊させたのである。この対立は、閉山してから20年以上経った現在でも、地元での元労組員と元新労員およびその家族たちの間のわだかまりとなって残っている⁽⁹⁾。

1960年3月29日、会社と新労による労働再開を阻止しようと、ホッパー（貯炭槽）まえに集結していた労組員たちを、暴力団の一団が襲い、労組員の久保清さんを刺殺した。それ以後、全国からの支援がさらに高揚し、ホッパー前で2万人の労組員と支援者が、1万人の警官と対峙する事態となった。8月に中央労働委員会から、労使対立を調停する斡旋案が示され、11月1日に、実質

1200名余の指名解雇をもって、三池闘争は終結した。三池労組員を「アカ」と指さし排斥する社会的風潮が全国的にみられ、解雇され異郷で暮らすようになった元労組員と家族を苦しめた。

終結後は、労組が築いた、労働者自らによる労働自治体制は崩壊し、三池労組員たちは不利な労働現場に配属されるという差別を受けた。新労成立後は、会社は新労メンバーになることを条件として新規雇用したため、約1年後には、新労員の数が労組員のそれを上回った。以後、労組員の数は激減してゆき、1997年の閉山時には15人となった。三池労組は莫大な資料を公開可能なものとして残したが、職員組合はいかなる資料も外に出すことをせず、新労は印刷されたもののみ譲渡した（大原 2015: 89）。対三池労組との関係の中で、自らの行動を正当化する思想を主張できない元新労組員たちは、自らを不可視の存在としなくてはならない立場に追いやられている。

第四に三池炭鉱の特徴としてあげられるのは、1963年11月9日に三川坑で起こった、458名の死者と839名のCO中毒患者をだした戦後最悪の炭塵爆発事故を典型とする大規模事故の発生である。三池闘争終結から3年後に起こったこの事故は、組合の弱体化、合理化による人員の削減、生産性重視による保安の怠りが背景にあった。1998年最高裁所判決で初めて、坑内発火を齎した清掃不足に対する会社の責任が公的に指摘されたが、会社はそれを認めていない。多くの新労員も被害にあったが、補償を求める闘争は、CO中毒患者の妻たちが中心になって行った。CO中毒患者は、ひどい後遺症に悩まされただけではなく、「ガス患」と蔑称され、補償欲しさの仮病などと言われるなど、社会的な差別を受けた。CO中毒患者のなかには暴力的になるなど人格の変容をきたした人も少なくなく、家族も深い苦悩を経験した。現在でも、この事故によるCO中毒患者と家族の苦しみは終わっていない。

第五に、8県11市23施設からなる世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の2つの構成資産として、三池炭鉱遺構（三角西港、専用鉄道敷跡、宮原坑、万田坑、三池港）が取り入れられた⁽¹⁰⁾ことが、三池炭鉱の特徴として挙げられる。この

世界遺産登録への動きは、1999年に九州の産業遺産を対象として鹿児島県から始まったが、やがて山口県が対象に加わり、登録が決定する段階では、日本国家が中心化された。国家の中心化は、以下の三点にあきらかである。第一に、「九州近代化遺産の保存活用に向けた鹿児島宣言」→「九州・山口の近代化産業遺産群－非西洋世界における近代化の先駆け」→「日本の近代化遺産群－九州・山口関連遺地域」→「明治日本の産業革命遺産－製鉄・製鋼、造船、石炭産業」という名称の変遷が挙げられる。第二に、世界遺産のための委員会所在地が鹿児島から内閣府へ移動したことが指摘できる。第三に、鹿児島に委員会があったときに作成されたHP⁽¹¹⁾における庶民への着目の視点が、世界遺産登録後に内閣府にある「産業遺産国民会議」によって制作されたHPでは失われ、西洋技術の日本への導入と日本の成功物語のみが中心化された。前者のHP掲載の映像の最後は、次のように結ばれていた。

「教科書に登場しない市民の情熱と生きざま」という文字提示のあとに、次のような写真⁽¹²⁾と文字が映し出された。

- ① 写真：仕事のあとに炭粉で黒い顔をして微笑む炭鉱マン
 文言：日本の近代化は時代を支える市民の情熱の歴史である。
- ② 写真：三池主婦会の人々の写真
 文言：歴史の教科書に登場してこない人々の人生
 彼らの汗で築かれた生活文化と知恵こそが、本当の意味での「産業遺産」である。
- ③ 写真：現在の軍艦島の団地跡
 文言：笑 涙 怒 わたしたちは人生を風化させたくない⁽¹³⁾。

世界遺産登録後の公式HPには、「歴史の教科書に登場しない」庶民に着目はみられない。そこには、西洋から技術を移入消化したことを中心化した世界遺産推薦書付属の英語ナレーションの映像、日本の近代化に焦点を当てた日本語ナレーシ

ョンの啓蒙用映像、「喪失」のイメージ消費を誘う、軍艦島の「廃墟」⁽¹⁴⁾を映し出したナレーションのない映像の3本が掲載されていた。前二者は、世界的なヘゲモニーと日本国家ヘゲモニーを反映し、「教科書的」である。

3. 『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山20年展』

三池炭鉱をめぐる以上のような歴史的現在のなか、閉山20年を期する展覧会『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山20年展』が、2017年に大阪で開催された。

3.1. どのように準備されたか——実行委員会メンバー

本展実行委員会「関西・炭鉱と記憶の会」は、市井の有志11名からなっている。委員長はいない。

本展実行委員会形成の発端は、2010年に京都と大阪で、三池炭鉱労働争議50周年を記念して開催された展覧会までさかのぼる。京都での展覧会は、本展の実行委員でもある東川絹子氏と前川俊行氏および東川氏友人の三人によって5月に開催された。東川氏と前川氏は三池労組員の、東川氏友人は新労員の父をもっていた。彼らはその展覧会の趣旨を、「地元では難しい労組関係者と新労関係者の和解」としていた。

本展「三池炭鉱閉山20年展」において取りまとめ役を務めた、エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）の谷合佳代子館長と千本沢子館長補佐が、法政大学大原社会問題研究所から展示品を借りて、『特別展示 三池争議から50年』を2010年の11月から12月に開催した。そこに来場した前川氏が、「三池炭鉱に関係する品なら、私ももっていますよ」と伝えたことから、彼の所蔵品もその展覧会に加えた。二組の主催者たちの協力が始まった。2013年には共同で、10月に京都で、11月に大阪のエル・ライブラリーで、「三池炭鉱炭塵爆発50年展 むかし炭鉱いま原発」を開催した。

本展実行委員会メンバー11名を以下に紹介する。

エル・ライブラリーは、公益財団法人大阪社会運動協会が運営する労働専門図書館である。大阪社会運動協会は、1978 年設立以来、大阪の社会運動史に関する資料を収集し、「大阪社会労働運動史」(既刊 9 巻)を発行。2000 年からは大阪府の委託を受け、「大阪府労働情報総合プラザ」を運営したが、2008 年、橋下大阪府知事の財政改革によって大阪府労働情報プラザは廃止され、協会に対する補助金もすべて打ち切られた。廃棄される運命となった大阪府労働情報総合プラザの旧蔵書約 17000 冊と、大阪社会運動協会の蔵書・資料を統合し、多くの個人、団体の支援によって 2008 年 10 月 21 日、エル・ライブラリーが開館した。市民ボランティアと寄付で支えられ、常勤職員は館長と館長補佐の 2 人のみ。谷合氏は、「日本一貧乏な図書館」と称している。2016 年には、ライブラリー・オヴ・ザ・イヤーズ優秀賞に選ばれた。設立趣旨に、「地域の記憶の場」たる図書館の役割を果たす、とある⁽¹⁵⁾。谷合氏は 1958 年生まれ、大学で日本現代史を、千本氏は 1967 年生まれ、大学で国文学を専攻した。二人とも大学生時代から大阪社会運動協会に関わり、そのまま同協会に就職した。

2010 年から展覧会を主催してきた前川俊行氏は、1952 年に三池炭鉱緑ヶ丘社宅(熊本県荒尾市)で生まれた。両親は農業移民で台湾に渡り、彼の地で出会った。戦後、引き揚げ、生活困難のなか、父は三池炭鉱に職を求めた。炭坑内で石炭を掘り出す「採炭」という職に携わる鉱員として、三川坑で働いていた。父は、三池炭鉱労働組合員であり、母は、三池炭鉱主婦会の地域副会長であった⁽¹⁶⁾。父が三池闘争の際に解雇され、前川氏 8 歳、1961 年の春に、一家は、職と生活を求めて、三池を後にした。こうして三池炭鉱緑ヶ丘社宅は、前川氏にとって望郷の念止まない故郷になるが、移動した先で母親から最初に言われたのは「三池から来たことは人に言ってはならない」ということであった。最初は岐阜に、さらに京都に。そこで、父は 61 歳の生涯を閉じた。タバコは吸わなかったのに肺が真っ黒であった。炭坑内の仕事に携わったほとんどの人が罹患した塵肺に起因する死であったのではないかと思われる

と、前川氏は語る。母は、京都から滋賀へ、滋賀から福井に移住し、清掃婦として働いていたが、交通事故により即死。63 歳であった。後に、前川氏は、その時の思いを次のように記している。「焼き場でのお骨拾いの時、カランとした母の遺骨を見て、ガク然とした。これが人間というもののか。この乾燥した白いモノのかけらが人間のなれの果てであるのか。悲しみよりも先に、人間の存在価値、生きていることの馬鹿バカしさを感じずにはいられなかった。何のために三池闘争の中などを頑張って生きてきたのか。これまでの母の全てが否定されたような気がしてくやしかった。そして、そういう「無」というものに対して腹が立ってしょうがなかった。」⁽¹⁷⁾前川氏は、母の死がホームページ開設につながったと語ったことがあるが、母の死から開設までにはかなりの年数がある。おそらく、母の死に際して、三池闘争にまつわる問が前川氏のなかで胚胎され、以後問い続けることになったのであろう。

望郷の念が、三池炭鉱への興味と結びつくことになったのは、1996 年、既に使われなくなっていた三池炭鉱四山坑の巨大な立坑が、爆破され崩れ落ちるテレビ映像を見た時であった。「私のフルサトが喪われる」という思いに駆られ、1997 年、三池炭鉱閉山の年に、ホームページ「異風者⁽¹⁸⁾からの通信」を開設し、三池炭鉱にかかわる聞き取り、取材、資料集めを行い、そこに掲載するようになった。ホームページは多くの反響を引き起こし、メールや手紙で思いを伝えてくる人、さらには、三池炭鉱にかかわる品々を前川氏に託す人々が次々と現れた。その集積が、本展でも展示された前川コレクションである。ホームページの噂を聞き知ったものの、ホームページになかなかアクセスできない人たちからの要望に応じて、2007 年からは、紙冊子形態の『異風者からの通信』を発行送付するようになった。「オリげ(私の家)にとって三池争議ちゃ、いったい何だったのか」「父ちゃん母ちゃんたちは何を伝えなかったのか」を問いつけながら「父ちゃん、母ちゃんたちが三池で生きてきた証を残し伝える」活動を地道に続けてきた。冊子版『異風者の通信』は 2021 年に 102 号を発行し、休刊した。

2010 年、2013 年にも前川氏とともに展覧会を主催した東川絹子氏は、1947 年生まれ。三池炭鉱四山社宅で暮らし、高校卒業後、京都の大学生協に就職した。京都に出てきて間もなく、「なんや、炭鉱の娘か」と侮蔑的に言われ、驚き、悔しく思った。以来、炭鉱での暮らしの素晴らしさを伝えていきたいと思うようになった。父は、天草の農家であったが、体が弱く農業のできない母のために、三池炭鉱へと転職したと語る、愛妻家であった。中学 1 年の時、三池労働争議を経験している。父は三池労組、母は主婦会のメンバーであった。争議の時には全国から参集したオルグ⁽¹⁹⁾が、三池労組員の家に分宿した。東川氏の家にも「オルグさん」が泊まり、多い時には、十数人の「オルグさん」のために母と食事を用意し、一緒に食べた。社宅は、おとなも子どもも平等に力を合わせて暮らしを築く場であり、家庭は民主主義の学校だったと、彼女は回想する。子どもの時の記憶をたどりながら、三池闘争のさなかに社宅で生み出された生活技術を現代に伝え、地域コミュニティ作りに生かしたいと強く願い、日常的に様々な活動をしている⁽²⁰⁾。2010 年と 2013 年の展覧会を開催したのもそのような日々の取り組みの一環であったと思われる。またその過程で、展覧会を見に来ていた福井氏、東川氏同様大牟田出身の上田氏、向井氏、鶴飼氏（後述）が本展実行委員会に加わった。

上田茂氏は、1948 年に生まれ、三池炭鉱新港町社宅で高校卒業まで暮らした。彼自身は与論島出身者ではないが、新港町社宅には、多くの与論島出身者が暮らしていた。両親は、敗戦とともに満州から故郷の玉名（熊本県）に引き上げてきた。父は、玉名から遠くない三池炭鉱に職を求めた。三池炭鉱の売店「三池商事」の事務の仕事をしていたが、三池労組員であったため三池闘争の際に指名解雇された。最後まで、解雇は無効だと法廷で争い、闘争の一環として 1970 年くらいまで社宅に住み続けた。上田氏は、高校卒業後、組合の強い職場で働きたかったため、大阪府の段ボール工場に就職。それは、三池労組が子弟たちを斡旋した工場で、当時の寮の住人の半分以上は「三池の子供」たちだった。「そのため親も安心し

て大阪に出したのだと思う」と上田氏は語った。29 歳の時に会社が閉鎖され、次に就職した会社で、「前の会社が閉鎖されたのは、組合が強かったからではないか」と言われ、「そんなことあるかい！」と悔しい思いをした。京都で東川氏、前川氏たちが開催した 2010 年、2013 年の展覧会のお手伝いをした。「何かしたい」と思って本展実行委員会に加わった。

鶴飼雅則氏は、1951 年生まれ。三井関係の会社に勤める父を持ち、大牟田市の会社社宅に、14 歳まで暮らしたが、父の転勤によって大阪に移住。子どものときは、大牟田に暮らしながら炭鉱のことはほとんど知らなかった。炭鉱についての知識は本などによった。子どもの時から現在に至るまで、彼にとって大牟田は工場の町である。大学卒業後、大阪のエネルギー会社に勤め、輸入炭に関係する仕事にも携わった。会社員時代の後半は、関西文化学術研究都市をフィールドに、研究所と学校、研究者と子どもたちをつなぐプロジェクトを立ち上げ、子どものための科学展、科学絵本の制作などを企画した。定年退職後は、京都府下の地方自治体で同プロジェクトを推進するとともに、地域ミュージアム・ネットワークを作る仕事などを手がけた。本展覧会では、『炭都と文化——昭和 30 年代の大牟田』（以下『炭都と文化』）⁽²¹⁾というコーナーの企画展示をおこなった。鶴飼氏の大牟田の景観の記憶は、工場廃液でぜんざいのような色になったり七色に光ったりした、悪臭を放つ川。展覧会準備が始まって間もないころ、会合の帰り道で、「どうして、この展覧会の準備に加わろうと思ったんですか」という私の質問に、「私が育った大牟田は、「ふるさと」の歌で歌われているような場所では全くなかったんですね。そんな大牟田は、文化不毛の地と言われたけど、私の記憶ではそうではなかった。」と語った。本展のために、何回も大牟田を訪れた。

向井美香氏。1961 年生まれ。大牟田市の商店の家出身だ。大牟田にいたときは、コンビナートは目に見えるのでわかったが三井三池炭鉱に関しては、ほとんどすべての炭鉱施設が地下にあり、実感がなかった。高校卒業と同時に、大学進学で京都へ。10 年ほど前に前川氏のサイト「異風者

からの通信」を偶然知り関心を深め、京都での「炭じん爆発 50 年展」で実行委員として参加したのをきっかけに勉強し、三池炭鉱があった故郷への自負と、負の歴史を知らずにいたことへの自責の念が生まれたという。現在大阪在住。本展覧会当時、コミュニティ誌を作る仕事に携わっていた。本展およびプレ企画の映画・幻燈上映会のチラシ、ポスター、図録の表紙デザイン、社宅地図や炭講談社地図の作成を、みんなの意見を聞きながら、一手に担当した。また、本展で行われた、炭鉱を話題とした落語公演が可能になったのは、彼女のネットワークによる。準備期間中に、大牟田に帰省し、元新労メンバーなど三池炭鉱関係者にインタビューを試みた。

西牟田真希氏、1980 年生まれ、本展実行員会最年少者。三池炭鉱に焦点をあてて、炭鉱遺産とまちづくりの研究をしている社会学研究者である。これまで集めてきた、炭鉱関係のグッズやパンフレットのパネルを展示した。そのほかポスター貼付依頼やチラシの配布依頼を大学などにする役割を果たした。西牟田氏は 2019 年に、本展実行委員会に関する活動についての論考「失った故郷を探究する熱意——関西移住者から見る三池炭鉱」を出版している⁽²²⁾。

福井滲子氏は 1932 年生まれ、東京に本拠地を置く劇団で仕事をしていたが、退職後、社会運動のしやすい京都に引っ越しをし、脱原発運動などに励んでいた。戦争体験者としてできることをしたいという思いが、彼女の社会活動を支えていた⁽²³⁾。

佐々木央氏は、1955 年生まれ、青森県むつ市出身の記者。唯一東京在住である。前川氏や谷合氏についての記事を書いたことがある。本展開催に合わせて記事を書いた。

私は、1953 年生まれ、1979 年から主としてインドネシアのフローレス島でフィールドワークを行っている人類学研究者。炭鉱に強い関心を持つようになったのは、2007 年度に行った「社会調査実習」という授業の一環で、旧産炭地である北海道夕張市に学生たちを引率すると決定した時からである。その後、2008、2009 年度にわたり、計 3 回夕張に、2014 年、2016 年、2017 年度には、

同じ北海道空知地方の旧産炭地、赤平市に学生たちを引率した。2014 年度には炭鉱をテーマに共同研究を実施した⁽²⁴⁾。

本展の開催に至るまでに、何回も全体会議や部分会議をもった。ML でのやり取りは、展覧会開催までに 3000 近くになった。2015 年 3 月には、福岡県大牟田市と熊本県荒尾市と一緒に訪れ、三池炭鉱関係者にインタビューを行った。また、映画会 4 回、幻燈会 1 回、落語会 2 回をプレ企画として開催した。

3.2. 本展の構成と内容

3.2.1. 展覧会場と展示構成

展覧会のスタッフは、実行委員会のメンバーとその他の業務補助のボランティアから構成された。入場無料、入場者総数は 655 人であった。

会場は、大阪府立労働センタービル 9 階にあるエルおおさかギャラリーを低料金で借りた。地の利のあるこのビルには、エル・ライブラリーをはじめ労働関係の事務所や施設が入っている。ギャラリーは、廊下を挟んで両側にある、仕切りのない長方形の部屋が廊下を挟んでいる二つの部屋からなる。エレベーターを降りてすぐ左手にある第一会場は床面積 126m²、壁面長 40m。第二会場は床面積 78m²、壁面長 32 メートル。第一会場は、部分パーティションで、4 つに区切った。第一会場と第二会場の間の廊下にもいくつか展示を行った。エレベーターを降りるとすぐ見える位置に、主催者挨拶と趣旨説明のパネルがおかれた。会場の全体の構成を考えたのは、エル・ライブラリー

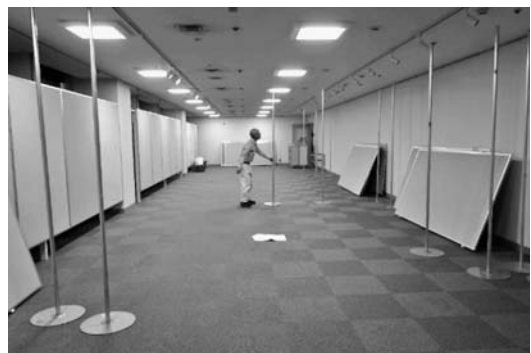


写真 1 展示設置前の第一会場 パーティションのポールを立てる 2017 年 5 月 4 日筆者撮影



写真2 パーティションのパネルをたてる 2017年5月4日 筆者撮影



写真4 与論会法被、坑内作業装備 など 2017年5月4日 筆者撮影



写真3 手作り展示台作成・設置 2017年5月4日 鄭良二氏撮影



写真5 三つの労働組合旗 2017年5月4日 筆者撮影

の館長補佐千本氏である（写真1、写真2、写真3）。

以下の図1. 会場見取り図を参照しながら展示について解説する。

3.2.2. 第一スペース・第二スペース：エル・ライブラリーによる展示

第一スペースには、右手に三池炭鉱の年表や歴史など一般的説明、正面に坑内作業の装備を身につけたマネキンと炭鉱労働の写真、大蛇山祭り⁽²⁵⁾参加の際に与論会（与論島出身者とその子孫の会）が揃えた法被を身につけたマネキン（写真4）。左手壁に、三池炭鉱労働組合旗、三池炭鉱新労働組合旗、三池炭鉱職員組合旗を並列（写

真5）。左手壁の展示は第二スペースまで連続し、三池闘争中の壁新聞3種、即ち、三池労組壁新聞、会社の壁新聞、大牟田再建市民運動本部壁新聞を並列。第三スペースを含む左手壁には、関西の労働組合との関係を示す資料と、手書きメッセージ入り赤旗やホッパーパイプなど三池闘争資料を展示。二つのパネル「大阪からの支援 総評」「大阪からの支援 全労」を並列して展示。右手第二スペースには、1963年の三池炭鉱三川坑炭塵爆発によるCO中毒患者となった鉱員の両親による手書きの「病状日記」（現物）、患者本人がつけた「病床日記」（現物）や患者の写真などとともに、三池炭鉱三川坑炭塵爆発とCO闘争の展示を、労働災害という切り口から構成している（写真6）。文書現物など、活字の入った展示物が多く、来場者は展示品を言説化する経験をする。

エル・ライブラリーは、展示物全体が労働問題

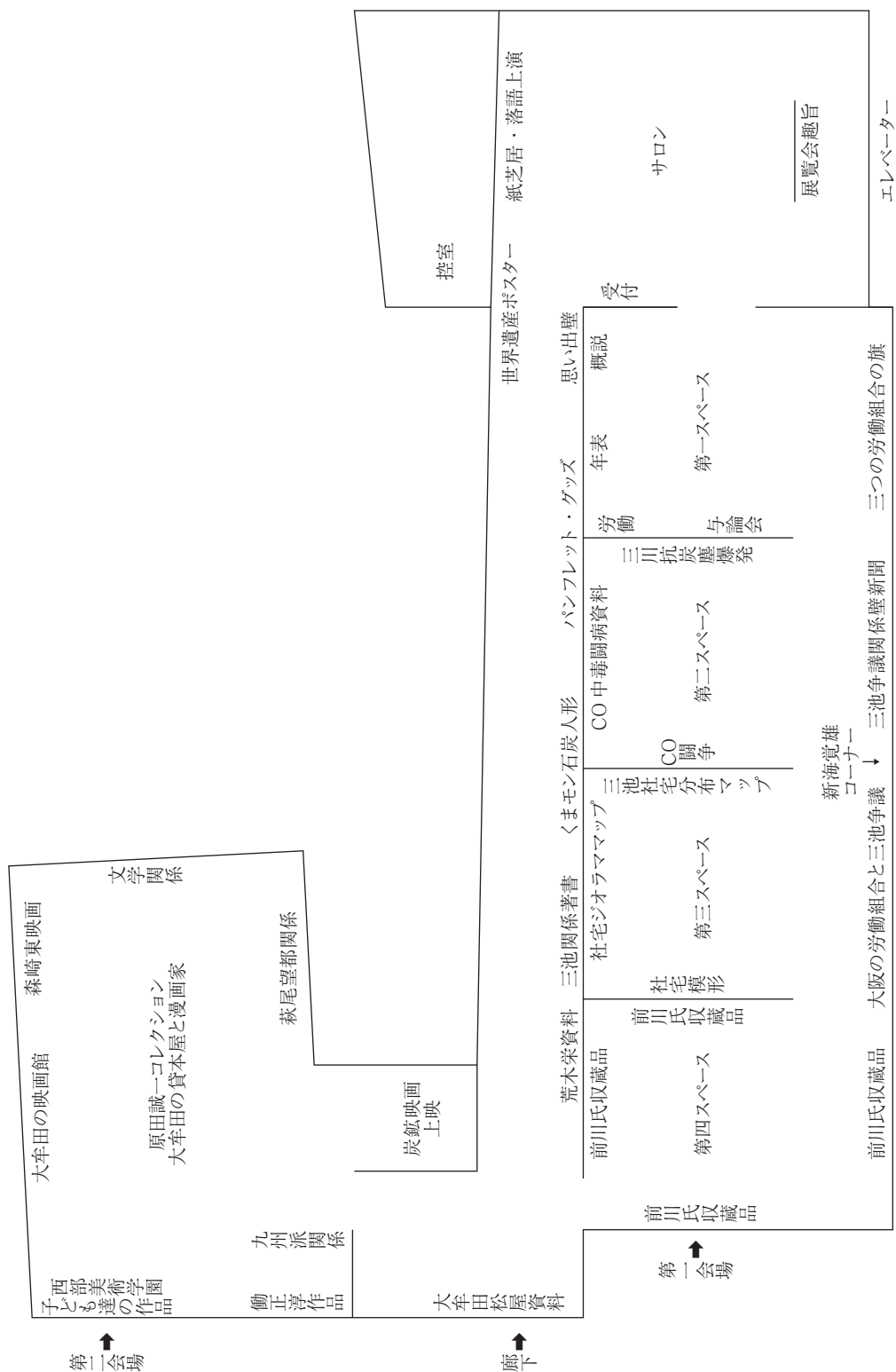


図1 会場見取図



写真6 三川坑炭じん爆発 CO 中毒患者日記と家族の日記 CO 闘争 2017年5月5日 筆者撮影



写真7 三つの社宅ジオラママップ（平台）と思い出写真 2017年5月5日 筆者撮影

の観点からみられるように展示を構成した。三池争議に関しては、次のような斬新な問題提起をおこなっている。三池争議の全貌はいまだ明らかになっていない。三池争議を明らかにするために中心的に光が当てられてきたのは三池労組であり、新労や職員組合の人々の声を擧げ上げてこなかったという傾向がないだろうか。新労や職員組合が、記録をあまり残さなかったことにも確かに原因の一端はある。しかし、同時に、少ないながらも残されている記録を取り上げてこようとしなかったこと、新労の人たちが複雑な思いを抱いたまま、沈黙せざるをえないような立場に置かれてきたことも事実であろう。展覧会図録に収録されている谷合論文は新労の人を含む多様な声に耳を傾けることの必要性を示唆し、千本論文は、新労側やそれを支持した全日本労働会議の資料などにあたり、三池争議の複雑な全貌に光を当てようとしている⁽²⁶⁾。そこでは、三池争議に関して三池労組に与えられた、抑圧と闘うマイノリティとしてのある意味の特権を相対化し、新労などを可視化しようとしている。

3.2.3. 第三スペースと第四スペース：炭鉱社会経験者たちによる展示

「社宅のくらし」というのほりを入口に置いた第三スペースには、50分の1スケールの炭鉱社宅模型と母と子と父親、および、仕事着を着て座る炭鉱マンの人形をガラスケースに展示。社宅模型と人形はそれぞれの専門家に作成してもらった。右手には、前川氏が手作りした、三地域（緑ヶ丘、四山、新港町）の社宅ジオラマ・マップが

平台に置かれ、それぞれの地域に住んでいた前川氏、東川氏、上田氏の懐かしい思い出が記されているパネルと、向井氏制作による三池炭鉱社宅分布地図が壁に展示された（写真7）。さまざまな強制労働、暴力的衝突、大事故など負の事実は人々の記憶に刻まれやすいが、その力に抗して、炭鉱社会での温かい生活を伝えるという、実行委員会、とくにそこで生活していたメンバーたちの願いがこれらの展示にはこめられていた。

前川氏は、建築関係の仕事をする子息に助けられながら、三地域の社宅マップを、薄い発砲スチロールを切って、張り合わせて作った。1997年に緑ヶ丘の社宅跡を訪れたとき、草深くて前に進めず、「おまえにはもう、故郷などない」と言われているようで涙したと冊子版『異風者からの通信』で述べている。彼にとっては、既に影も形もなくなってしまった故郷の社宅を、ジオラマ・マップという形に再現することは、大きな意味を持っているに違いない。

第三スペースでは、ジオラマ・マップやパネルを介して、上田氏、東川氏、前川氏が来場者と語らいながら説明し、来場者同士が語らう情景がしばしば見られた。

「前川俊行コレクション」と標された第四スペースでは、前川氏が保存するモノ、大半は寄贈されたモノが展示された。第三までのスペースと比べると、モノが密集していた。寄贈品は寄贈者ごとにまとめられ、寄贈者と前川氏のやり取りが書かれたパネルがおかれた（写真8、写真9、写真10）。前川氏や元鉱員やその家族が保有してい



写真8 寄贈者ごとにまとめられた展示品と前川氏と寄贈者の通信文パネル 2017年5月5日 筆者撮影



写真9 前川俊行コレクション 激励の書きこまれた赤旗など 2017年5月5日 筆者撮影



写真10 前川コレクション 前川氏と語らいながら展示品に見入る寄贈者たち 2017年5月5日 筆者撮影

たモノ、前川氏が購入したモノも展示された。三池炭鉱関係の現物が最も多いスペースである。前川氏は会場近くに宿をとり、毎日会場に詰めた。寄贈者たちが大牟田市やその他の遠方から来場し、三池炭鉱社会やその他の炭鉱社会でくらし

経験のある人たちが展示物に見入り、時に涙し、前川氏と語らう姿が見られた。来場した寄贈者の中には、新たにモノを寄贈し並べて帰る人もいた。自ら所有する書籍を展示していく人もいた。展覧会開始時には、前川コレクションの展示物207点と数えられたが、閉会時には展示物数が増えていた。

寄贈物によって前川氏に贈られたのは、経済的価値ではない。そこで贈与受領されたのは、日常的な言語では魂と言っているような、モノに宿る「なにか」である（Mauss 1967: 10; Taussig 1980: 124）。モノたちは、寄贈者ごとにまとめられた。このように展示することによって、前川氏は、モノに何かを表象させるのではなく、モノそのものが語る物語に耳を傾けてほしいと考えていたようだ。

母の死によって胚胎された実存的な問い。8歳にして故郷から切り離された生。望郷の念の激しさとは裏腹に、故郷での記憶は極めて断片的だ。「断片的な記憶」を「一つに完成させたい」という思いがHPや冊子の発行を続けさせているのかもしれないと、前川氏は書いている。また、「遠い昔の出来事でも、三池に生きた父や母たちが私たちに語り残したかったこと、大切なものがあるはずだと、私はふるさと三池の中にこりもせず今もお探しものをしています。」とも書いている。前川氏にとって、モノたちは、「遠い昔の出来事」を宿している。以上のことから、前川氏は、アレゴリー的方法によって一つの全体的布置像を模索しているともいえよう。

アレゴリー的方法は、遺稿『パサージュ論』において、ベンヤミンが集大成するはずだった理論である⁽²⁷⁾。アレゴリー的方法とは、この世界のうちに断片として存在する一見無関係な事象を、アレゴリーとしてそれが本来的に有していた全体の構造的性に基づいて配置することによって、一つの布置像＝星座（コンステラツィオン）のイメージを浮かび上がらせる。イメージ（唯物的像）をイメージのまま、概念化せずにとらえて、布置像＝星座（コンステラツィオン）を感じることができるようになることがベンヤミンのアレゴリー的方法の実践である。それは、世界を言語

によって意味に分節する主流の知の在り方に対峙するものである。ベンヤミンのアレゴリーの実践が、神学的偏在論あるいはライブニッツのモナド論支えられ、神学的救済につながるものであるのに対し、前川氏の問は、神学的偏在論やモナド論といった、包括的な寄る辺をもたない。前川氏のアレゴリーの実践のほうが、ベンヤミンのそれよりも開かれているともいえる。(ベンヤミン 2003 [1982], 山口 2003)。

前川氏が保存し展示した三池炭鉱に関わるモノは、自らの生につながるさまざまな人の生を宿し、かけがえのない唯一性を宿し、記号や表象としては大きな余白を残す。たとえ工場生産された主婦会の複数のバッジであっても、「同じ物」ではない。何を表象しているかは常に問いに付され、唯一性を宿しているため、モノはフェティッシュ、即ち、人間に働きかけるエイジェンシーとなっている。

上で用いた分析概念フェティッシュ *fetish* について説明しよう。ド・ブロス、フロイト、マルクスはともに人間主体中心的観点から、モノに力の源を見出すことを「錯誤」と断じる。「錯誤」を生じる人間の精神的作用を指してフェティシズム、そのモノを指して「フェティッシュ」という語を使っている。それに対し、ここで使うフェティッシュは、かれらの人間主体中心主義を逆照射する分析概念である。近代知は、主体である人間がモノや事象を対象として生産される。主体である人間はそれらの対象を「事実 *faits*」としてくり出し、知的営みたるものは「事実」に基づかなくてはならないとする。「事実」を支えるメディアは、文字・フィルム・録音機器など外的媒体に標された記号である。なかでも、近代以降重要視されるのが数字である。「未開民族」の信仰をフェティッシュ信仰と断じたのは、この眼差しである。逆に、眼差しをひっくり返せば、近代は「事実神」⁽²⁸⁾のカルトに陥っていると、ラトゥールは指摘する (Latour 2010)。前川氏の展示したモノはこういった意味合いを孕んでいる。

3.2.4. 第二会場、廊下スペース、サロン

第四スペースの後方に出入り口があり、それを出ると、廊下を挟んで向かいにある、第二会場に



写真 11 第二会場「炭都と文化」 働正・淳父子の作品と大牟田を描いた子供たちの絵 2017年5月4日 筆者撮影



写真 12 第二会場「炭都と文化」 映画館 漫画 文学 2017年5月4日 筆者撮影

入れるようになっている。第二会場の小さな一角が、炭鉱関係映像映写スペースになっている以外は、すべて、鶴飼氏が企画展示した『炭都と文化』のコーナーである。当時の大牟田の写真、デパート、映画館、貸本屋に関する資料のほか、大牟田出身の漫画家、画家、詩人の作品、大牟田ゆかりの映画監督に関する資料など、数多くの作品や出版物を展示した (写真 11, 12)。

『炭都と文化』は、三池炭鉱、なかでも、三池労組運動と炭塵爆発という、三池労組と三井資本と国家が主な登場主体となる当時の大牟田という場において展開する「大きな物語」から零れ落ちてしまうモノたちを展示した。それは鶴飼氏自身の大牟田での経験を掘り上げる。

二つの会場の間の廊下も展示スペースとして使った。順路に従って右手の壁に、三池労組に所属していた若き音楽家荒木栄の展示。これは、東川

氏の友人で、荒木栄のもとで若いとき活動していた人から預かった資料である。次に、鶴飼氏が仲介して実現した、有明高専の学生たちが作った、くまモンの石炭人形。旧産炭地で西牟田氏自身が集めたパンフレットなどを張り付けた大きなパネル、そのほかの炭鉱関連のグッズもおかれている。順路の最後となる壁には、記憶の壁と名付けたボードを置き、誰でもが感想などをかいて貼れるよう、その前の机にポストイットと筆記用具を置いた。会期中に、58 件の「思い出」が貼られた。その向かいには、西牟田氏が太牟田市や荒尾市からもらい受けてきた大量のパンフレットを、自由に持って帰れるように置き、その前の壁には、自治体がつけている「明治日本の産業革命遺産」を構成する炭鉱遺構のポスターを貼った。

廊下を抜けると、エレヴェーターホールにもどる。そこに、応接セットを置いたサロンをしつらえた。そこには、誰でもが手を出せるように、大牟田銘菓をテーブルの上に置いた。これは、谷合氏の発案である。サロンでは、毎日 2 回東川氏が紙芝居を演じ、型抜き飴や水あめを聴衆に配った。「坑内で働く父親の仕事への誇り、父親としての細やかな愛情、炭じん爆発事故により中毒患者となった父を看護師となった娘が温かく見守る現在」という紙芝居のストーリーは、炭鉱社宅の友人の実体験に基づいて、東川氏が創作した。絵は若い画家に依頼した。東川氏は、紙芝居展を開催したことがある鶴飼氏の紹介で、京都府で今でも紙芝居をしている男性と会い、指導を受けると同時に、昭和 20 年代の紙芝居と、紙芝居枠を借



写真 14 笑福亭仁勇師匠の落語を楽しむ 2017 年 5 月 7 日 筆者撮影

り受けた。東川氏は、古い紙芝居で観客を楽しませた後で、自作の紙芝居を上演した（写真 13）。5 月 7 日と 8 日には笑福亭仁勇師匠⁽²⁹⁾が三池炭鉱に関する創作落語を提供した（写真 14）。これは向井氏のネットワーク力によって実現した。サロンでは来場者たちが集い歓談し、紙芝居と落語を楽しんだ。しばしば実行委員会メンバーが歓談に加わり、そこには交流の場が出現した。

結 語

第一章で述べたように、社会の変容に連動して、マイノリティの声を響かせるというポストコロニアル批判に代表される方向と商品消費を含む娯楽的消費とアート化という方向、さらに集いの場へとミュージアムが向いつつある歴史的現在において「三池炭鉱閉山 20 年展」が開催された。

本展の第三・第四スペースとサロンに典型的に示されているように、本展は、神殿でもフォーラムでもなく、来場者とスタッフの集いと応答の場所であった。新自由主義的現状は、西洋を中心とする国際ヘゲモニーや国家のヘゲモニーに直接結びつかない公共施設の解体を促進している。エル・ライブラリーは、そのような解体の後に、さまざまな市井の人々による寄付とボランティアで設立維持されてきた、神殿性があらかじめ失われた公共機構である。維持運営してゆくためには、さまざまな意見や立場の人々の協力が不可欠であるエル・ライブラリーは、あえてフォーラムになることはしない。論争は、協力者の分裂・離脱の



写真 13 サロンにて紙芝居上演 2017 年 5 月 5 日 筆者撮影

可能性を孕んでいるからである。

本展実行委員会も、さまざまな意見と立場の人々からなっている。開催までの3年以上の間に、多くの会合がもたれ、メーリングリスト上でもアイデアのやり取りがされたが、他のメンバーの意見に異が唱えられることはほぼなかった。会場が労働関係のビルの中にあり、大阪産業労働資料館（エル・ライブラリー）が取りまとめ役になっている。エル・ライブラリーは、労働問題の視座から三池炭鉱をとらえているが、それが本展全体の方向性となっていない。展覧会場の各スペースは、緩やかに相互連携しながらも、それぞれの担当者によって独自に取りまとめられた。実行委員会自体が、フォーラムではなく、集いと応答の場であった。

前川氏、東川氏、上田氏、鶴飼氏に関しては、炭鉱や労働組合、炭鉱と工場の町である故郷に関して、排除、侮蔑、周辺化を受けた経験が、展示に参加する動機の重要な部分をなしている。しかし展示では、人権やPCに基づく視点から排除的社会を照らし出して来場者へコミットメントを求めることはせず、一般社会が周辺化した彼らのアイデンティティのよりどころの豊かさをモノと物語で提示することによって、来場者の応答を誘っていた。

また、三池炭鉱の労働者たちは、国家と資本によって歴史的に流転させられたマイノリティの系譜をなしてきた。西洋を中心化する国際ヘゲモニーと国家ヘゲモニーを体現する世界遺産『明治日本の産業革命遺産』の一元的ストーリーは、そういった歴史を不可視化するので、人権の観点から批判の対象となりうる。けれども、実行委員会は、そういった批判は展開せず、世界遺産の知名度を広報のために戦略的に利用し（セルター1987 [1980]）、展覧会本番では、廊下の片すみに世界遺産関係のポスターやパンフレットを置くにとどめていた。

展覧会は、モノを提示することが中心となる場であり、モノは完全な表象化、すなわち記号化、をすり抜ける余白を常にもっている。近代の神殿としてのミュージアム／展覧会は、上から下への一方向的な権力作用によりモノを一元的に表象化

し、余白を消し去ろうとする。フォーラムとしてミュージアム／展覧会は、対等で自由な思考をするエイジェンシー間の論争の場であると想定される。論争されるためには、モノは表象に、さらに言説に置き換えられることが必要になる。そこにはモノに対する記号化への強制力が人々の間に働く。また、対立するにしろ合意するにしろ、議論がかみ合うためには、共通の思考の基盤に立たなければならない。共通の基盤が人権やPCであったとしても、結果として人の思考とモノとの関係を拘束する。それに対し集いと応答は、モノの表象化の余白を認め、思考の余白を許容する出会いである。本展はこのような出会いを実現する場であった。

市井の人たちが企画運営した展覧会であり、商品消費を含む娯楽的消費化とアート化はみられないものの企画運営者および入場者の多様性 *diversity* が相互侵犯せず並び立つようになっている点に関しては、本展は、歴史的現在における展覧会の潮流の一つをなすものであるといえよう。また、ばらばらになりがちな個人が集い応答したという点に関しては、革新的な展覧会の形を実現したといえるかもしれない。一方、本展が、三池炭鉱の歴史に刻まれている数多くの社会・政治・倫理的問題を自他に突き付け、コミットメントを求めることをしていないという点は、歴史的現在の重要な示唆を無視しているようにも見える。しかしながら本展は、モノの表象化の余白を認め、自他の思考の余白を容認することにより—特に前川コレクションに顕著のように—贈与される「なにか」・アレゴリーをなすもの・フェティッシュとしてモノをそのまま提示することにより、国際的・国家的ヘゲモニーの一元的ストーリーが依拠する主流の知の在り方に対抗する知の可能性を宿していたといえるのではないだろうか。

謝辞

本稿執筆にあたり、「関西・炭鉱と記憶の会」の皆さん、お話をお聞きした大牟田市、荒尾市、夕張市、岩見沢市、赤平市の皆さんには大変お世話になりました。龍谷大学社会学部社会調査実習での指導、同人権問題研究委員会助成の共同研究から貴重な経験

を得ることができました。深くお礼申し上げます。

注

- (1) 同展は巡回展として、6月6日から30日まで、関西大学博物館でも開催されたが、本稿ではエル・おおさかの展覧会のみを論ずる。巡回展開催は、関西大学経済・政治研究所との共催である。
- (2) 様々な宗教の寺院や寺院群、ストーンヘンジ、伝統的儀礼建造物群などに比しても同様のことがいえるだろう。
- (3) 丹波マンガン記念館 <http://tanbamangan.sakura.ne.jp/>, 満蒙開拓平和記念館 <https://www.manmoukinenkan.com/> などがそれにあたる。
- (4) 赤平市在住。鉱員の妻主婦会会員であった女性（当時70才代半ば）の2014年9月4日の語り。
- (5) 2014年9月4日、赤平市労働資料センターにおける語り。
- (6) 夕張市では2007年、2008年、2009年、2010年、2013年、2014年に、朝日町では2014年に、赤平市では2014年、2016年、2017年に、大牟田市では2014年にお話をお聞きする機会を得た。
- (7) 前川2007-2021, 森崎1982 [1977], 農中2016, 田嶋2000, 上野1967, 熊谷2005; 2013, 「異風者からの通信」<http://www.miike-coalmine.org/>。
- (8) 三井炭鉱では炭鉱社宅と言われたが、北海道空知の炭鉱では炭鉱住宅、略称炭住、という名称が使われた。
- (9) 両者の対立をなくす活動も行われてきている。例えば、三川坑炭塵爆発（後述）のあと三池労組と新労はそれぞれ別々に犠牲者慰霊碑を建てたが、2020年にすべての犠牲者のための慰霊碑が建立された。
- (10) 「世界遺産としての価値」
<http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/site/ouv/>
- (11) 九州遺産群 <http://www.kyuyama.jp/2016年3月末日で閉鎖。>「明治日本産業革命遺産」HP <http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/index.html/>
- (12) 写真は、本稿の以下に登場する前川俊行氏 HP 掲載のものであり、鹿児島県庁のひとが映像掲載に当たって前川俊行氏に電話で許可を求めてきたが、HP 閉鎖は前川氏に通知していない。（2017年2月10日、同年4月20日、前川氏談）
- (13) 松浦2013: 44, 加藤1999 参照。
- (14) 端島（通称軍艦島）の「廃墟」は、大正時代になってから建てられた鉄筋コンクリート建造物が無人になってからできたものであり、「明治日本の産業革命遺産」とは無縁である。にもかかわらずこの映像が加えられているのは、世界遺産登録が現地の観光産業に資すると謳われているためである。「喪失」イメージ消費を求める「廃墟マニア」の増加と同じように、現代における娯楽的消費と共振する。
- (15) エル・ライブラリー ABOUT <http://shaunkyo.jp/about/> 参照。
- (16) 大阪産業労働資料館&関西・炭鉱と記憶の会 編2017『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山20年展』関西大学政治・経済研究所 p67.
- (17) 前川2007『異風者からの通信』第7号
- (18) 前川氏の「ふるさと」熊本の言葉で「かわりもの」を意味し、「いひゅうもん」と読む。
- (19) オルガナイザーの略称。三池の外から三池闘争に派遣され共闘した労働組合員や大学生は、オルグまたはオルグさんと呼ばれた。
- (20) 大阪産業労働資料館&関西・炭鉱と記憶の会 編2017 前掲書, p.18, p.69-71。
- (21) 同書 p.117-163。
- (22) 神本秀爾・岡本圭史編, 2019, 『ラウンド・アバウト——フィールドワークという交差点』集広舎に収録。
- (23) 2021年12月に逝去されました。合掌。
- (24) 共同研究報告書『炭鉱における生と死』を発行した。
- (25) 大牟田市にある6つの祇園系の神社から、木製の山車に竹と和紙で作った大蛇をのせて、町を練り歩き、最後には、大蛇を燃やす祭り。300年以上前に始まったとされる。毎年7月に開催され、2017年には35万人の人出があった。おおむた「大蛇山祭り」<http://www.omuta-daijayama.com/about.html> 参照。
- (26) 谷合佳代子2017「三池炭鉱労働組合と関西の労働運動」p.76-86. 千本沢子2017「三池争議における全労による支援—三池新労支援オルグを中心に—」p.87-101. とともに、大阪産業労働資料館&関西・炭鉱と記憶の会 編2017掲載。
- (27) 集大成は、第二次世界大戦中ナチスドイツのユダヤ人迫害がヨーロッパ中に広がるなか、ユダヤ人であるベンヤミンの自死によって途絶えた。
- (28) 英語で factish gods, フランス語で faitish dieux。Factish, faitish はブルーノ・ラトゥールの造語。両方とも「事実」を意味する語—fact（英語）と fait（フランス語）—からつくられている。フランス語

では fetish と faitish の韻遊びがうまくいっている。
(29) 2017 年 12 月に急逝されました。合掌。

日本語文献

- 青木恵理子編 2015『炭鉱における生と死』（2014 年度共同研究報告書）龍谷大学人権問題研究委員会
赤平市史編纂委員会 2001『赤平市史 上』『赤平市史 下』赤平市
上野英信 1967『地の底の笑い話』岩波新書
NHK 取材班（大門博也・高田仁）「三池争議：激突「総資本」対「総労働」NHK 取材班『戦後 50 年・その時日本は 第 2 巻』pp.7-213 NHK 出版
大阪産業労働資料館&関西・炭鉱と記憶の会編 2017『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山 20 年展』関西大学政治・経済研究所
大原俊秀 2015「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱資料とその目録について」『エネルギー史研究』30: 83-109.
加藤康子 1999『産業遺産：地域と市民への歴史への旅』日本経済新聞出版
鎌田慧 1986『去るも地獄残るも地獄』筑摩書房
川田順三 2007「〈特別寄稿〉失望と期待とー新博物館が適するもの」『芸術新潮』第 58 巻第 3 号：88-94.
木村至聖 2014『産業遺産の記憶と表象：「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会
窪田幸子 2014「博物館とフェティシズム：秘匿と開示をめぐる地域博物館の抵抗と交渉」田中雅一編『フェティシズム研究 2 越境するモノ』pp.355-386. 京都大学学術出版会
熊谷博子 2005『三池：終わらない炭鉱の物語』（映画）Siglo 配給
熊谷博子 2012『むかし原発いま炭鉱：炭都〔三池〕から日本を掘る』中央公論新社
熊谷博子 2013『三池を抱きしめる女たち：戦後最大の炭鉱事故から 50 年』NHK ETV2014 年 11 月 30 日放送分視聴
クリフォード、ジェームズ 2002 [1997]『ルーツ——20 世紀後期の旅と翻訳』月曜社
クレイン、スーザン・A 編著『ミュージアムと記憶：知識の集積／展示の構造学』ありな書房
古村えり子 2005「「闘う主婦」の誕生：日本炭鉱主婦協議会の活動から」『北海道教育大学紀要』55 (2)：187-201.
セルトー、ミッシェル・ド 1987 [1980]『日常の実践のポエティーク』国文社
田川泉 2014「歴史の翻案：合衆国における博物館コレクションの政治性と象徴性」田中雅一編『フェティシズム研究 2 越境するモノ』pp.317-346.
竹沢尚一郎 2015「序章 フォーラムとしてのミュージアム」『ミュージアムと負の記憶ー戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』竹沢正一郎編著 pp.3-36.
田中智子 2012『三池炭鉱炭じん爆発事故に見る災害福祉の視座』ミネルヴァ書房
田中雅一 2014「性を蒐集・展示する」田中雅一編『フェティシズム研究 2 越境するモノ』pp.395-416. 京都大学学術出版会
谷合佳代子 2014「第 205 回産業セミナー 三池炭鉱の記憶と大阪：『むかし炭鉱、いま原発 三池炭鉱炭じん爆発 50 年展』を振り返って」『セミナー年報』1-13.
谷合佳代子 2017「三池炭鉱労働組合と関西の労働運動」大阪産業労働資料館&関西・炭鉱と記憶の会編『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山 20 年展』p.76-86. 関西大学政治・経済研究所
千本沢子 2017「三池争議における全労による支援ー三池新労支援オルグを中心にー」大阪産業労働資料館&関西・炭鉱と記憶の会編『炭鉱の記憶と関西 三池炭鉱閉山 20 年展』p.87-101. 関西大学政治・経済研究所
デルコン、クリス 2014「21 世紀のための美術+建築——テート・モダン」PARAPSOPHIA + Future Beauty 共同研究プロジェクト オープンリサーチプログラム（レクチャー）（4 月 4 日開催@京都国立近代美術館）
永吉守 1998「ライフヒストリーに観る炭鉱労働者像：閉山間近の三井三池炭鉱労働者の『語り』より」『熊本大学文化人類学調査報告』2: 1-96.
西牟田真希 2010「三池炭鉱における社宅コミュニティ」『社会情報』19(2)：219-223.
西牟田真希 2019「失った故郷を探究する熱意——関西移住者から見る三池炭鉱」神本秀爾・岡本圭史編『ラウンド・アバウト——フィールドワークという交差点』集広舎
農中茂徳 2016『三池炭鉱宮原社宅の少年』石風社
林えいだい 1992『死者への手紙：海底炭鉱の朝鮮人坑夫たち』明石書店
バレ、カトリヌ&ドミニク・プーロ 2007『ヨーロッパの博物館』雄松堂
平井陽一 2000『三池争議ー戦後労働運動の分水嶺』ミネルヴァ書房

- フェーア, ミヒヤエル 2009『あるミュージアムとその記憶』スーザン・クレイン編『ミュージアムと記憶－知識の集積／展示の構造』伊藤博監訳 ありな書房
- ベンヤミン, W. 2003『パサージュ論第一巻』岩波書店
- ボミアン, クシシトフ 1992『コレクション：趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社
- 前川俊行 1997～2017『異風者からの通信』1号～73号
- 松浦雄介 2013『記憶と文化遺産のあいだ：三池炭鉱の産業遺産化をめぐる』『西日本社会学年報』11: 37-50.
- 松宮秀治 2003『ミュージアムの思想』白水社
- 村田麻里子 2014『思想としてのミュージアム：ものと空間のメディア論』人文書院
- 森崎和江 1982 [1977]『まっくら』三一書房
- 森崎和江・川西到 1971『与論島を出た民の歴史』たいまつ社
- 矢野牧夫・丹治輝一・桑原真人 1978『石炭の語る日本の近代』そしえて
- 山口裕之 2003『ベンヤミンのアレゴリー的思考』人文書院
- 吉田憲司 1999『文化の「発見」：驚異の部屋からヴァーチャルミュージアムまで』岩波書店
- 吉見俊哉 1992『博覧会の政治学：まなごしの近代』中公新書

外国語文献

- Duncan, Cameron F. 1971 'The Museum: a Temple or the Forum', *Curator: The Museum Journal*, XIV(1): 11-24.

- Henning, Michelle 2006 *Museums. Media and Cultural Theory*. Open University Press.
- Latour, B. 2010 *On the Cult of Factish God*. Duke University Press.
- Marstine, Janet 2006 *New Museum Theory and Practice: An Introduction*, Blackwell.
- Mauss, M. 1967 *The Gift*. NY: Norton
- Taussig, M. T. 1980 *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. University of North California Press

Website

- 異風ものからの通信
<http://www.miike-coalmine.org/index.html> (2017 年 5 月 18 日最終閲覧)
- エル・ライブラリー ABOUT
<http://shaunkyo.jp/about/> (2017 年 5 月 18 日 最終 閲覧)
- 大蛇山祭り <http://www.omuta-daijayama.com/about.html> (2017 年 7 月 31 日閲覧)
- 九州遺産群 <http://www.kyuyama.jp/> 2016 年 3 月 末日で閉鎖 (2016 年 2 月 10 日最終閲覧)
- 世界遺産としての価値
<http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/site/ouv/> (2017 年 7 月 31 日閲覧)
- 丹波マンガン記念館 <http://tanbamangan.sakura.ne.jp/> (2023 年 8 月 15 日最終閲覧)
- 満蒙開拓平和記念館 <https://www.manmoukinenkan.com/> (2023 年 8 月 15 日最終閲覧)
- 明治日本産業革命遺産
<http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/index.html/> (2017 年 7 月 31 日最終閲覧)

An Exhibition “Miike Coal Mine with a Focus on Memories Embraced
in Kansai, Commemorating the 20th Anniversary of Its Closure”
in the Historical Present:

From a Perspective Concerning Objects, Re-presentations, Exhibitions, and Minorities

Eriko Aoki

Located across Omuta City, Fukuoka and Arao City, Kumamoto, the Miike Coal Mine was a centre of socio-political movements around 1960, but it eventually closed in 1997. Today, its representation as a part of the UNESCO World Heritage Sites, registered in 2015 as *Japan's Meiji Industrial Revolution*, gives a totally different image to the mine from the one around 1960. In 2017, an exhibition entitled “Tanko no Kioku to Kansai: Miike Tanko Heizan 20-nen Ten” [Miike Coal Mine with a focus on memories embraced in Kansai, commemorating the 20th anniversary of its closure] was held at the Osaka Prefectural Labor Center. The author acted as a member of its executive committee, Kansai, Tanko to Kioku no Kai [the Kansai group for the coal mine and its memories], from 2013 to 2017. This article clarifies how the exhibition could be placed in the context of historical present, from a perspective concerning objects, re-presentations, exhibitions, and minorities, reflecting on the author's experiences.